

アイルランドから来た新入生 —*The New Girl at St. Chad's*におけるナショナリズム—

志 渡 岡 理 恵

1. はじめに

イギリスで女学校小説という文学ジャンルが誕生したのはそれほど昔のことではない。その原型は18世紀半ばには存在するものの、教育制度と密接な関わりを持つこの文学ジャンルが確立するのは、女子の中等・高等教育が始まる19世紀後半である¹。F.Busらが中心となって女子教育改革を行い、Girton CollegeやNewnham Collegeをはじめとする女子高等教育機関が設立され、Roedeanのような、男子校と同じカリキュラムを採り入れた女学校がつくられ始めると、このような学校に通う10代の女の子を描いた女学校小説が爆発的な売れ行きを示すようになる。

そんな比較的新しい文学ジャンルである女学校小説のカリスマ的存在だったのがAngela Brazilである。彼女が生涯に書いた学校小説は長編が約50冊、短編が約70篇に及ぶ。アッパー・ミドル・クラスの少女たちが生き生きと学校生活を楽しむ様子を描いた彼女の作品は多くの少女たちを夢中にさせた。作品中で多用される女学生言葉が真似されるのを危惧してA.Brazilの作品を図書館から締め出す学校図書館も少なくなかったという事実からも、その人気のほどがうかがえるだろう。

女学校小説では新入生を主人公にした物語は定番だが、A.Brazilの*The New Girl at St. Chad's* (1912)もそのひとつである。アイルランドで生まれ育ったヒロインHonor Fitzgeraldは、最先端の女子教育を行っているイングランドのChessington Collegeに入学し、初めて大人数の教室で授業を受け、さまざまな学校行事に参加し、個性豊かな同年代の少女たちと共同生活を送ることで“the esprit de corps” (26)を身につけていく²。家庭でのガヴァネスによる教育しか受けたことがないHonorが、学校という場で何を学び、どのように成長していくかがこの物語の中心的なテーマとなっている。

A.Brazilの作品は当時の10代の少女たちに大きな影響を与えたにもかかわらず、その影響を分析した包括的な研究はまだなされていない。しかし、イギリスの少女文化に対する関心は、フェミニズム批評をはじめとする新しい文学批評の流れを受けて、1970年代以降、英米を中心に高まりを見せてきた。たとえば、Mary CadoganとPatricia Craigの共著である*You're Brick Angela: The Girl's Story 1839-1985* (1976)は、数多くの少女小説をとりあげ、このジャンルの全体像を捉えようとした先駆的

な研究である。Sally Mitchell の *The New Girl: Girls' Culture in England, 1880-1915* (1995) は、少女像が大きく変化した世紀転換期に焦点を絞り、少女小説ばかりでなく、Girl Guide や女学校のような組織の活動にも目配りをきかせた画期的な研究書である。最近では、第一次世界大戦と少女文学の関係を論じた Jane Potter の *Boys in Khaki, Girls in Print: Women's Literary Responses to The Great War 1914-1918* (2005) や、Girl Guide と戦争の関係に注目した Janie Hampton の *How the Girl Guides Won the War* (2010) など、より細分化した少女文化の研究が始まっている。

このような研究動向の中で、2011年、女学校小説に1章を割いた Michelle J. Smith の *Empire in British Girl's Literature and Culture* が出版された。19世紀末から20世紀初頭の少女文化と帝国主義の関係に注目したこの研究書は、本論でとりあげる *The New Girl at St. Chad's* を数ページとはいえ、初めて論じている。著者 M.J.Smith はこの作品を、自己中心的だった Honor が学校教育を通して他人を思いやる少女へと成長していく物語と捉えているが、ヒロインがアイルランド人であることがどのような意味を持つのかに関しては考察していない。

Honor の成長物語を読み解いていくためには、彼女がアイルランドの、それも古くからイギリスからの独立精神を育んできた南部アイルランド地方出身の少女であるという設定の意味をよく考える必要がある。彼女が学校で起こすトラブルには、アイルランド人であるということが深く関わっているからである。本論は、当時の女子教育の状況およびアイルランドの独立問題をふまえながら、Honor が学校生活を送る中で共同体における自分の立場を理解していく過程が、政治的文脈ではどのように解釈できるかを示すことを目的とする。

2. アイルランドの娘

物語の主人公 Honor Fitzgerald は、アイルランド南西部の Kerry の屋敷で暮らす15歳の少女である。父親はアイルランド南部 Munster のフェージリア連隊の指揮官で、ボーア戦争ではめざましい武勲を立てた。そして、小作人を抱える地主でもある。もともとイングランドとの結びつきが強く、Unionist の多いアイルランド北部 Ulster とは異なり、Munster にはイングランドによる支配からの独立心が古くから育まれていたと言われている。Munster の一部を成す Galway は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての Irish Renaissance の拠点のひとつでもあった。また、この地方は名勝が多く、アイルランドでも豊かな自然に恵まれた地域としても知られている。

そのような自然豊かな土地で生まれ育った Honor は、5人の兄弟と戸外で釣りや水泳、ドライブ、乗馬をして毎日を過ごす“a child of nature” (17) である。彼女の性格は、先祖と結びつけられて、次のように描写されている。

All the wild Irish blood of the family seemed to have settled in her; the high spirits, the fire, the pride, the quick temper, the impatience of control, the happy-go-lucky, idle, irresponsible ways of a long line of hot-headed ancestors had skipped a generation or two, and, as if they had been bottling themselves up during the interval, had reappeared with renewed force in this particular specimen of the Fitzgerald race. (17)

Honor には、アイルランド人的な気質とされるもの—生氣に溢れ、情熱的でカッとしたりやすく、押さえつけられることに我慢できず、気楽で怠け者で無責任—がまるで隔世遺伝により濃縮されて伝わったかのように受け継がれている。

さらに、Honor は Sydney Owenson の小説 *The Wild Irish Girl; A National Tale* (1806) 以来の典型的なアイルランド娘のイメージ—アイルランドをこよなく愛する自然のままの少女—を継承している³。母親は娘を “my wild bird” (26) と呼び、物語の語り手は “this wild Irish girl” (43) と表現する。“The wild Irish girl” のイメージを構成する 2 つの要素は、(イングランドの「文明」に染められていない) 自然のままの状態であることと、強い愛国心と考えられる。Honor はアイルランドの自然を心から愛し、アイルランド人であることを誇りに思っている少女である。家庭でガヴァネスから教育を受けているが、彼女を飼い馴らそうとするガヴァネスの試みはことごとく失敗し、屋敷にはガヴァネスが居つかない。ある日、勝手に馬を購入して父親の怒りを買ひ、イングランドの Chessington College に入学するよう命じられた Honor は、イングランドに対する反感を露わにする。

“I can’t ever like England!” sobbed Honor. “I’d rather have our mountains and lakes and bogs than all the grand streets and houses. I’m Irish to the core, and I don’t believe any school over the water can change me. There’s no place in the world like Kilmore. I love even the cabins, and the peat fires, and the pigs, and the potatoes! I shan’t forget a single stick or stone of it, and I shall never know a moment’s happiness till I’m home again.” (24)

この 15 歳の少女の “I’m Irish to the core, and I don’t believe any school over the water can change me” という熱狂的な言葉の背後には、日頃このような発言を繰り返しているであろう周囲の大人たちの存在が感じられ、Nationalist の多い地域で子供が大人の反イングランド感情をなぞる姿が想像される。一方で “I love even the cabins, and the peat fires, and the pigs, and the potatoes!” と涙するヒロインの描写には、思わず読者を微笑ませるようなユーモアも漂う。

こうしたユーモアは、作品のいたる所に散りばめられ、作品全体を包むカラッとしたり明るい雰囲気を作り出している。そして、それはヒロインの性格と関連づけられている。イングランドへ行くことを最初は嫌がるものの、どうせ行かなくてはならないならできるだけ楽しもうと、Honor は直ちに気分を切り替える。いよいよ学校へ向けて家を出発する日、母と娘は別れに際して対照的な態度を見せる。窓辺で目に涙を浮かべて見送る母親に対し、娘の Honor は馬車から元気いっぱい手を振る。母親はそんな娘を見て次のように思う。

“Surely,” she said to herself, “school will have the influence that we expect! The general atmosphere of law and order, the well-arranged rules, the esprit de corps and strict discipline of the games, all cannot fail to have their effect; and among so large a number of companions, and in the midst of so many new and absorbing interest, my wild bird will find her wings clipped, and will settle down sensibly and peaceably among the others” (26)

ここで注目すべきは、母親が娘の学校での教育に期待している内容だろう。19世紀後半に入り女子教育改革が始まるまでは、中産階級以上の娘たちの多くになされていたのはダンスや音楽、フランス語会話をはじめとするたしなみ教育だった。その目的はよい結婚相手を見つけることで、少女の心身の成長を重視したものではなかった。それとは異なり、Honorの母親が学校教育に期待しているのは、規則や団体精神が娘を集団の中にうまく落ち着かせてくれること、つまり娘に社会性を育んでくれることである。これは20世紀初頭の女学校小説に共通して見られる大きな特徴で、現実世界の女子教育改革が小説に反映された例のひとつと言えるだろう。

こうしてHonorは牧歌的なアイルランドの家庭から最先端の女子教育を行うイングランドの女学校へと旅立つのだが、このアイルランドの娘はイングランドの女学校で何を学び、どのような成長を遂げていくのだろうか。

3. 私的領域から公的領域へ

Honorが入学するのは、19世紀後半のイギリスにおける女子教育改革の理想を具現化したような、最新の設備を備えた、男子校と同様のカリキュラムを組む女学校である。広々とした敷地には講堂や図書館、礼拝堂、体育館が建てられ、化学実験室もつくられている。5つの寮には200人の女学生たちが収容されており、生徒たちは6時45分に起床、7時半に朝食、8時半に礼拝、9時から13時まで授業、午後はスポーツ、16時にお茶、19時半に夕食というタイムテーブルに従って生活している。入学後、Honorは親友となったJanieに、入学する前、兄弟たちに次のようにかからわれたと打ち明ける。

They said that Chessington was exactly on the model of a boy's college, and that if girls learnt Latin and mathematics, and played cricket and hockey, and had a gymnasium and debating society, it put such a masculine element into them that they couldn't refrain from using brute force, instead of any other means of persuasion. (83)

ここで“a masculine element”として言及されているもの—ラテン語、数学、クリケット、ホッケー、運動、討論—は、19世紀前半まで女性には不向きとされ、女子教育から締め出されていた。女子がラテン語の勉強やスポーツをするようになれば、自分の言い分を通そうとして男子と同じように暴力的な手段に訴えるようになるはずだという論法は、Honorの兄弟たちが冗談で言ったことにすぎないものの、当時の女性差別的な言説が子供の世界にも浸透していたことを示す証左と言えるだろう。

Chessington Collegeが「新しい」のはカリキュラムばかりではない。校長を務めるのは、女子高等教育の先陣を切ったGirton Collegeで優秀な成績をおさめた「新しい女」、Miss Cavendishである。彼女は、ギリシャ人のような整った顔立ちをした、波打つ金髪的女性で、高位聖職者の娘であり、堂々たる威厳を漂わせている。このMiss Cavendishの描写には、(イギリスもしくは大英帝国の象徴である) Britanniaを思わせるものがある。ある時、彼女は新入生のHonorに“*We have many nationalities here, and do you imagine that every girl can be permitted to carry out her individual taste?*” (38)

と言う。Miss Cavendishは、さまざまな国の生徒たちを学則という共通のコードで統括する長である。彼女は Girton College で学び、しばらく研究に従事したのち、自分の天職は教職だと考え、現職に就いた。保護者たちからの評価は高く、生徒たちからは愛されているというよりは、尊敬されている。

Not a remarkably tender woman, she was perhaps more respected than loved by her pupils; but she had great powers of administration, and managed to impress upon her girls a strict sense of duty and responsibility, a love of work, a fine perception of honour, and a desire to keep up the high tone and prestige of the school. (36)

“Not a remarkably tender woman”という表現には、作者の「家庭の天使」的な女性像に対する皮肉が感じられなくもないが、管理・運営能力に秀で、生徒たちに義務感や責任感を植えつけることができる Miss Cavendish は、19 世紀までの母親のように優しい女教師とは別種の資質を備えた、新しいタイプの女教師と言える。

このようにさまざまな面で「新しい」女学校に入学した Honor は、初めて目にする多くの同年代の学友や、規律正しいクラスでの授業風景に驚く。いわゆる「お嬢様」として好きなように振る舞ってきた彼女は、Chessington College の生徒がみな背筋をしゃんと伸ばし、授業に集中して取り組み、無駄話をせず、質問には即座に答え、教師の指示に速やかに従う姿をとても新鮮に感じる。次の一節には、家庭という私的領域から出て学校という公的領域に足を踏み入れた少女の困惑と違和感、そして新しい経験に胸を躍らせる様子が鮮明に描かれている。

After the quiet and solitude of Kilmore Castle, to be at Chessington College seemed like plunging into the world. It was almost bewildering to meet so many companions, all of whom were busily occupied with employments into which she had not yet been initiated. It was an especially fresh experience for Honor to belong to a class, instead of learning from a private governess, and she much appreciated the change. It interested her to watch the faces of her schoolfellows, and to listen to their recitations, or their replies to Miss Farrar's questions. The strict discipline of the place astonished her: the ready answers, the total lack of whispering, the way in which each girl sat straight at her desk, giving her whole attention to the subject in hand; the prompt obedience, even the orderly manner of filing out of the room for lunch, all were as unusual as they were amazing to one who had hitherto behaved as she liked during lessons. She felt for the first time that she was a unit in a large community, and began to have some dim perception of that esprit de corps to which Miss Cavendish had referred during their interview in the study. (42)

注目したいのは、“She felt for the first time that she was a unit in a large community”という部分である。それまでの Honor には、アイルランド人で、Fitzgerald 家の一員であるという自覚は強くあったものの、これらは生まれ持ったアイデンティティであり、血縁関係に由来するものであった。これに対し、Chessington College の一員であるためには、定められたルールに従って行動しなければならず、

何らかのかたちで学校全体に貢献することが求められる。

Honor がこのことを実感するきっかけとなるのは、学友 Vivian との会話である。ある日、家柄の良さを自慢する Honor に、Vivian はさも軽蔑したかのように“Who are the Fitzgerald?” (148) と言う。即座に後悔した Honor は、学校では“each was judged solely and entirely on her own merits” (148) なのだということを知る。そして、学校全体の中での自分の立場について次のような理解をするようになる。

A large public school is indeed a vast democracy, and members are estimated only by the value they prove themselves to be to the general community: their private possessions and affairs matter little to the general community, but their examination successes, cricket scores, or tennis championships are of vital importance. All, to use an old phrase, must find their own level, and establish a record for themselves apart from home belongings. Honor was beginning to realize that among two hundred girls she was a mere unit, and that her opinions and prejudices counted as nothing against the enormous weight of universal custom. (148-9)

Honor をはじめとする Chessington College の生徒たちは、さまざまな学校行事に参加していく中で、自分たちひとりひとりがこの学校の名譽を担っているのだという自覚を持ち始める。そして、自分の個性を生かして学校にどのような貢献ができるかを考え、学校全体の中で果たすべき役割を模索していく。いったん自分の居場所を見つけると、彼女たちは責任感をもって義務を果たすことに全力を注ぎ、よい結果を出して仲間から認められることにより、自信をつける。この作品をはじめとする 20 世紀初頭の女学校小説の中心を成すのは、このような一連の過程である。

4. 異分子をとりこむ

しかし、さまざまな個性がひしめき合う集団の中では、当然のことながら頻繁に衝突が起こる。Honor の場合、何よりもアイルランド人であることが諍いの原因となってしまう。具体例を見てみよう。まずは、寮でお喋りをしている少女たちの輪の中に突然入りこんで、Honor が自己紹介をする場面である。Honor が“My name is Honor Fitzgerald, and I come from Kilmore, near Ballycroghan, in County Kerry” (5) とおどけた調子で型通りの挨拶をすると、スコットランド出身の少女 Chatty Burn が“Then you’re Irish!” (5) と息をのむ。この Chatty の反応から、当時アイルランドはイギリスの一部ではあったものの、アイルランド人はどこか異質なものとして捉えられていたことが分かる。これに対し、Honor はおどけた調子を崩さずに次のように答える。

“Quite right. First class for geography! County Kerry is exactly in the bottom left-handed corner of the map of Ireland. It’s a more hospitable place than this is. I’ve been here nearly two hours, and nobody has offered me any refreshments yet. I’m simply starving!” (5)

Honor の返答からは、陽気で物怖じしない性格とともに、学友たちのアイルランド人に対す

る偏見のこもった反応をできるだけ軽い調子で切り抜きたいという思いも読み取れる。しかし、“schoolgirl banter” (12) は容赦なく始まってしまふ。Claudia は、“Irish names are often rather peculiar” (12) とアイルランド特有の名前について意地悪を言い、Flossie は“St. Patrick and pigs always go together, in my mind. I suppose you keep a pig in Ireland?” (12) とふざけて尋ね、“I’m sorry we’ve no potatoes to offer you” (12) と嫌味を言う。気性の激しい Honor は、“They’re only teasing you because you’re new. They want to see how much you’ll stand” (12) となだめる Dorothy の制止を振り切ってまともに反論し、真っ赤な顔で部屋を飛び出していく。

次に、Honor が起こす最初の事件を見てみよう。この事件にもアイルランドが深く関わっている。前に述べたように、Chessington College には5つの寮があり、それぞれの寮のシンボル・カラーが決められている。Honor の属する寮 St. Chad’s のシンボル・カラーはオレンジ色である。オレンジ色のリボンが巻いてあるセーラーハットを渡された Honor は、こんな帽子はかぶれないと頑として拒否し、その理由を“*You ask me to wear orange? Why, the very name of ‘Orangeman’ sets my teeth on edge. I’m a Nationalist to the last drop of my blood; we all are, down in Kelly*” (32) と述べる。Orange Society は、1795年に北部アイルランド地方で結成された秘密結社で、プロテスタントの優位とアイルランドのイングランドへの帰属を主張した組織である。プロテスタントだった William III (William of Orange) の名にちなみ、オレンジ色のリボンを記章としていた。アイルランドの独立を求める Nationalist が多い南部アイルランド地方の Kerry 出身である Honor にとって、オレンジ色のリボンを身につけることは、同胞を裏切り、Unionist に転身してしまったかのような気持ちになる行為なのだ。もし今いる場所が故郷の Kerry であったなら、Honor がオレンジ色のリボンを拒絶するのは当然の振る舞いと受け取られたかもしれない。

しかし、彼女が今いる場所はイングランドの Chessington College である。ここでは Kerry の Honor の家とは全く別のコードが支配している。学友は興奮する Honor に半ばあきれながら、“*Our hats have nothing whatever to do with politics*” (32) と諭す。入学したばかりで、規則を無視して自分の主張を通すことがどのような結果につながるのかまだ分かっていない Honor は、セーラーハットにアイルランドを象徴する緑色のリボンとシャムロックを縫いつける。

Honor stood turning the hat round and round, with a very queer expression on her face. She was a devoted daughter of Erin. Her country’s former glories and the possible brilliance of its future as a separate kingdom could always provoke her wildest enthusiasm; to be asked, therefore, to don the colour which in her native land stood as the symbol of the union with England, and for direct opposition to national independence, seemed to her little sort of an insult to her dear Emerald Isle....She would show these Saxons that she was a true Celt! They might compel her to wear their emblem of bondage, but it should be with an addition that would proclaim her patriotic sentiments to the world. (32)

セーラーハットのリボンの色のことで国の独立問題まで持ち出していきり立つ Honor の姿は、冷めた学友の反応と対比されることで、コミカルに描かれてはいるものの、この作業を終えた後で彼女

が呟く“Nobody could possibly mistake me now for a Unionist. I’m labeled ‘Home Rule’ as plainly as can be” (32)という言葉に、女学校小説には似つかわしくない“Unionist”や“Home Rule”という政治用語が含まれていることには注意したい。“Home Rule”は、1870年から1920年にかけてアイルランドのNationalistが要求し続けたことである。10代の少女が主な読者層だったAngela Brazilの女学校小説にこのような用語が登場しても不思議ではないほど、アイルランドの独立問題は当時の社会に浸透していたということだろうか。

こうして規則違反を犯したHonorはMiss Cavendishに呼び出されるが、Britanniaを思わせるMiss Cavendishが力ではなく議論でHonorを説得しようとする点は意味深い。彼女は、生徒が罰を恐れる気持ちからではなく、公正さと価値を認めることによって規則を守るよう指導する方針を採っている。軍人の娘であるHonorには軍隊を例にとるのがよいと判断したMiss Cavendishは“What occurs when a soldier commits any breach of regulations?” (39)と尋ねる。“He is court-martialled and punished” (39)とHonorが答えると、“Is that just?” (39)と問いかけ、頷くHonorにそう判断する理由を訊く。続くふたりの会話は以下の通りである。

“Oh, because – because – it’s the Army, and they must! There couldn’t be any discipline without.”

“Exactly! You are an officer’s daughter, and you evidently appreciate the vast importance of good discipline. Now, we are a little army here. Every girl, as a member of this community, is bound to preserve its rules, which have been wisely framed, and deserve to be faithfully kept. You have been guilty of a very grave breach of our regulations, and by your own showing you merit punishment. Do you consider this to be just?”

“Yes,” returned Honor, meeting the head mistress’s look firmly. “We have an esprit de corps at the College,” continued Miss Cavendish, “which makes each girl anxious to keep up the credit and prestige of the school....” (40)

ここで当時のアイルランドとイギリスの関係を思い返してみよう。1860年代にイギリスの自由党の指導者William Ewart Gladstoneが首相になると、彼はアイルランド土地法をはじめとする数々の改革を行い、数回に渡ってアイルランド自治法案を国会に提出する。こうなると、アイルランドのNationalistたちは、それまでのようにイギリス全体を敵とはみなせなくなる。やがてアイルランドのNationalistたちとGladstone率いる自由党は協力し合うようになり、両者の同盟関係は1914年に第一次世界大戦が勃発するまで続く⁴。The New Girl at St. Chad’sが出版されたのはこの時期である。武力ではなく、国会での議論によって政治的要求を通していこうとする姿勢がアイルランド・イギリス関係に見られた時期に書かれた物語であることを考えながらこの一節を読むと、学校小説という枠の背後にある政治的言説が浮かび上がってくるように思われる。

5. おわりに

スポーツでめざましい活躍をしたり、誤解されて仲間はずれにされたり、さまざまな経験をしながら約3カ月間の学期を終え、休暇を過ごすためにアイルランドに戻った Honor は、アイルランドを旅立った時と比べると、まるで別人のように変化している。

The Honor who returned to Ireland next day was indeed changed from the one who had left home in disgrace only thirteen weeks before – so much more thoughtful, sympathetic, and considerate, with higher ideas and nobler aspirations that she scarcely seemed the same.... (231)

“I’m Irish to the core, and I don’t believe any school over the water can change me” (24) と言っていたアイルランドの娘は、イングランドの女学校で母親が期待した通りの教育を受け、共同体の一員として規則に従い、全体の利益に寄与することを考える Britannia の娘として帰ってくる。現実世界では、第一次世界大戦終結後、1916年のイースター蜂起を経て、1922年、アイルランド自由国が誕生することになるわけだが、*The New Girl at St. Chad’s* は、そんな大きな情勢の変化が起こる前のアイルランドとイギリスの関係の一端を象徴的に垣間見せてくれる小説とも言えるだろう。

付記

本稿は、平成24–25年度JSPS科研費による研究（挑戦的萌芽研究、課題番号24652063）「20世紀イギリスの『新しい少女』—女学校文化とガールガイド文化」の成果の一部である。

注

- 1 最初の少女の学校小説は Sarah Fielding の *The Governess: or Little Female Academy* (1794) と考えられている。
- 2 本稿では、イギリスはイングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズを含むブリテンと同義語として用いる。
- 3 19世紀末から20世紀初頭の女学校小説には、“the wild Irish girl” がよく登場する。たとえば、女学校小説の始祖とされる L.T.Meade も、1910年に *A Wild Irish Girl* という作品を出版している。
- 4 波多野、第6章参照。

参考文献

- Brazil, Angela. *The New Girl at St. Chad's*. Gloucester: Dodo Press, 2008. Print.
- Cadogan, Mary. *Mary Carries on: Reflections on Some Favorite Girls' Stories*. Bath: Girls Gone By Publishers, 2008. Print.
- Cadogan, Mary and Patricia Craig. *You're a Brick, Angela!: A New Look at Girl's Fiction from 1839 to 1975*. London: Gollancz, 1976. Print.
- Craig, Patricia, ed. *The Oxford Book of Schooldays*. Oxford: Oxford UP, 1994. Print.
- Drotner, Kirsten. *English Children and their Magazines 1751-1945*. New Haven: Yale UP, 1988. Print.
- Foster, Shirley and Judy Simmons. *What Katy Read: Feminist Re-Readings of 'Classic' Stories for Girls*. Houndmills: Macmillan, 1995. Print.
- Freeman, Gillian. *The Schoolgirl Ethic: Life and Work of Angela Brazil*. London: Allen Lane, 1976. Print.
- Levine, Philippa, ed. *Gender and Empire*. New York: Oxford UP, 2004. Print.
- Mitchell, Sally. *The New Girl: Girls' Culture in England 1880-1915*. New York: Columbia UP, 1995. Print.
- Nelson, Claudia and Lynne Vallone, ed. *The Girls Own: Cultural Histories of the Anglo-American Girl, 1830-1915*. Athens: University of Georgia Press, 1994. Print.
- Potter, Jane. *Boys in Khaki, Girls in Print: Women's Literary Responses to the Great War 1914-1918*. Oxford: Clarendon Press, 2005. Print.
- Qingly, Isabel. *The Heirs of Tom Brown: The English School Story*. London: Chatto & Winduc, 1982. Print.
- Robinson, Jane. *Bluestockings: The Remarkable Story of the First Women of Fight for an Education*. London: Penguin, 2009. Print.
- Smith, Michelle. *Empire in British Girls' Literature and Culture: Imperial Girls, 1880-1915*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2011. Print.
- Tinkler, Penny. *Constructing Girlhood: Popular Magazines for Girls Growing up in England 1920-1950*. London: Taylor & Francis, 1995. Print.
- 河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006。
- 滝内大三『女性・仕事・教育—イギリス女性教育の近現代史』晃洋書房、2008。
- 田代幸造「*The Wild Irish Girl*におけるナショナリズム」『明治教養論集』216（1989）：1-21。
- 波多野裕造『物語アイルランドの歴史—欧州連合に賭ける“妖精の国”』中央公論新社、1994。